
第のセカンド幼馴染は...

TARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箒のセカンド幼馴染は…

【Nコード】

N3540Z

【作者名】

TARO

【あらすじ】

篠ノ之箒は転校先の小学校で1人の男の子と出会う。

転校し家族と離れ離れになり1人ぼっちになってしまった箒と友達になってくれた男の子。そんな彼とは小学校6年までずっと一緒にいた。しかし彼はある日突如その姿を消してしまう。警察が捜索を行ったが遂に彼が見つかることは無かった…。

そして3年後。箒は入学したIS学園で彼と再開することとなる。しかしそこで出会った彼はもう、以前の彼ではなかった…。

ISオリ主ものです。モデルは黒の王子様です。 ちよつと設

定に無理があつたりするかも知れませんがそれでもok。と言う方、
暖かく見守って下さい。
因みに作者は現在原作勉強中です。

プロローグ

「さて、じゃあ今回の任務を言い渡すわ」

暗い室内にて二つの人影が向かい合っている。

一つはたった今声を発した少女のもの。

流れる清水のような蒼い髪。意志の強そうな紅い瞳。10人の男とすれ違えばその10人が振り返るような美貌と抜群のプロポーション。その口元には薄く笑みを湛えている。

その少女に対するは全身黒尽くめの男。

その身体は首から足首まで漆黒のマントで包まれており更に唯一肌を除かせているその顔もその半分を隠すようにバイザーのような黒いサングラスに覆われている。唯一見えているその口元は硬く真一文字に結ばれていた。

パンツ。と小気味いい音をたてて少女が白い扇子を開き口元を隠す。その扇子には『IS学園』とやけに達筆な文字で書かれていた。

「今回の任務はIS学園に潜入し織斑 一夏の護衛を行うことよ」

彼女の口から出た『織斑 一夏』とはつい最近全世界に発表された世界で唯一ISを動かすことが出来る男性のことだ。

IS インフィニット・ストラトス とは天才科学者『篠ノ之 束』

によって開発された宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツのことである。

そのISは現在その本来の開発目的である宇宙開発に使われることなく軍事兵器として全世界に広まっている。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されており、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器である。

特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。

そしてISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができる。

さらにハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

そしてさらにさらに、ISにはこれを究極の機動兵器足らしめる機能が搭載されていた。

それが『自己進化』である。

ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる『形態移行』を行い、より進化した状態になる。つまり操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになるのだ。

各国は挙ってISの研究、開発に力を入れ始めた。

ところがここで問題が一つ発生した。ISの心臓部であるコアは完全にブラックボックスと化していて開発者である篠ノ之束にしか製造出来無かったのである。

そしてここでもう一つ問題が発生してしまう。それが篠ノ之束の失

踪である。

彼女は突如コアの製造を止めて行方をくらませてしまい、ISの数は今まで彼女が製造したコアの個数、合計で467機に固定されてしまったのだ。

当然、各国間でコアの熾烈な奪い合いとなったわけなのだが現在ではそれも落ち着き、各国は少しでも他国と差をつけようとISの研究、開発に躍起になっていた。

さて、ここまで長々と説明したがこのISにはただ一つ決定的な欠陥が存在していた。

ISは女性にしか動かすことが出来ないのだ。

しかし、だからといってこれほどの兵器を使わない手は無い。

そのため現在世界の男女の社会的パワーバランスは一変して女尊男卑が当たり前になってしまったのだ。

そしてそこに現れた、世界で唯一ISを動かすことが出来る男性『織斑一夏』。

こんな存在を世界の研究者達が放っておく筈が無かった。

彼を調べればISを女性しか動かすことが出来ない原因が分かるかもしれない。男性でもISを動かすことが出来るかもしれないのだ。それらの理由からして各国が彼に接触をとろうとすることは明らかだった。

その中に誘拐などを行おうとする奴等がいないとは限らない。そのため彼はその身をIS学園に置くことを余儀なくされたのだっ

た。

IS学園とはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校である。

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約がある。

勿論、そんな学園の警セキュリティが軽微な筈が無い。つまりそこに彼の身を置き保護しようというわけである。
しかし、

「『IS学園はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない』…なんて規定は半ば無実化している。全く干渉されないなんてことはありえない。そこで…」

彼女はそこまで言うと言元を隠していた扇子をたたみ、男へと歩み寄る。

「貴方の出番ってわけ」

扇子で男の胸を突きそう告げた。

すると今まで一言も発せず彼女の言葉を聞いていた男がその硬く閉ざされていた口を開いた。

「俺はISを動かすことは出来ない」

「知ってるわ。でも貴方には『アレ』があるじゃない」

「『アレ』はISなどではない」

「大丈夫よ。少し形は異常だけど、今の世の中『アレ』を見てIS
と知らない人は居ないわ」

男の口調は単調でまるで機械を思わせるようだったが、少女は特に
気にした風も無くそれに応える。

「それにシールドエネルギーの表示とか、ISと同じように見える
ようにこつちで偽造しておくわ。…ここまでするのだから引き受け
てくれるわよね。それにこの任務…」

そういつて彼女は妖艶に微笑むと今まで男の胸を突いていた扇子を
身体を上を滑らせるように男の顔の前まで持っていくと

「貴方の大嫌いなISを合法的に潰すことが出来るのよ？」

男の心の最も暗く黒い部分を突く言葉を投げかけた。

それを聞いた男は何も言わず、ただ踵を返しこの部屋唯一のドアへと歩いていく。

そしてドアの前に立ちそのドアノブへ手を掛けたとき不意に口を開いた。

「何時からだ」

「3日後よ。その日に学園の入学式があるから彼と一緒にのクラスになつてもらうわ」

突然の男の問いかけに対し、少女は動揺することなくそれに応じる。まるで男がそう尋ねることが分かっていたかのように。

それを聞いた男は少女の方を見ることが何も言うことも無く部屋を出て行った。

一人部屋に残された少女は男が出て行ったドアを見つめて、

「少し炊きつけ過ぎちゃったかしら？」

そう呟いた。

彼女は見てしまった。

表面上は冷静に保っていた彼の顔が薄く光っていたのを。

それが何を意味するのか。それを知る人間は彼女を含めて僅かな人数しか居ない。

しかしその理由を知っている彼女は彼を炊きつけるためとはいえ、

あんな言葉を彼に投げかけてしまったことを後悔するのだった。

プロローグ（後書き）

実は作者も一つ小説を書いております。

それと平行して書きますので更新は遅くなると思いますが、どうぞ
よろしく願います。

第1話

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

1年1組の教室内に先程自己紹介をしてもらったこのクラスの副担任である山田^{やまだ}真耶^{まや}先生のぼわつとした、なんとも締まらない声が響く。

そんな彼女の容姿であるが、その声の通りと言っていいのか童顔で（眼鏡を掛けているのだがサイズが大きいのかずれていてそれが彼女の顔をまた幼く見せている）背が低く、おまけに身に着けている衣服のサイズが合っていないのかだぼついていてそれがさらに彼女を幼く見せていた。

「それじゃあ皆さん、1年間よろしくお願いします」

そんな彼女が生徒に向かって挨拶をしているのだが、残念ながら生徒達の視線が彼女に向けられることは無かった。

なぜなら彼女達の視線は皆一様にある一点へと向けられているからだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で…」

誰からも反応されない副担任は涙目になりながらも何とかこのSHRを進行させていく。

流石にその言葉を見無視する生徒達ではなかったようである。出席番号1番の生徒から自己紹介が始まっていた。

そんな中、彼女 篠ノ之 篁も他の生徒たちと同様に一点を見つめていた。

その視線の先にあるのは……いや、居るのは織斑 一夏。世界で最初にISを動かした男であり、篁の幼馴染である。

彼と篁は小学校のときに1年生から彼女が引越す小学校4年生までずっと同じクラスだったのだ。

そして彼は篁の初恋の相手でもあったのだ。

切欠は小学2年生の時、同級生の男の子からいじめられていたところを彼が助けてくれたことだった。

それ以前は彼と何かと馬が合わずに衝突ばかりしていたのだがそれ以降は名前で呼び合うようになり、さらに同じ剣道の道場に通うことで打ち解けていったのだ。

それ以来、彼のことが気になっていた篁だが小学4年生のときに引越してしまつてそれ以降は会うことも無かった。

つまりおよそ6年ぶりの再会となるのだ。

初恋の相手と6年ぶりの再会。そんな状況にときめかない女の子はいないだろう。

もちろん篁もそんな女の子の一人であり、久しぶりに見た彼の横顔に胸をときめかせていた。

不意に、彼が彼女の方を振り向いた。

どこか縋るようなその視線に彼女は思わず顔を背けてしまう。

何とか表情は先程からの仏頂面を崩さなかったがその顔はほんのりと紅く染まっていた。

思わず顔を背けてしまつたが変に思われなかっただろうか？

顔が紅くなつたのがばれていないだろうか？

「えー……えつと、織斑　一夏です。よろしくお願いします」

そんなことを彼女が考えている間に彼の自己紹介が始まってしまったようだ。

生徒達の視線が彼に集中する。その視線には皆一様にこれから何を話してくれるのかという期待が込められている。

「……………」

しかし彼は何も語らない。いや、語れない。

今まで普通の、何処にでもいるような学生だった彼はこんなに大量の、それも全て異性からの視線に晒されたことなどなかった。

そしてそんな状況になってしまった今、彼は思考が完全に停止してしまったのだ。

しかし、何か言わなければ。

このまま黙っていたら『暗いやつ』なんて不名誉なレッテルを張られ1年間を過ごさなければならなくなる。

そんな考えが彼の脳裏に過ぎり兎に角何か喋らなければと必死に頭を働かせる。

そしておよそ15秒。

ひとつ大きく息を吸った彼が口にした言葉は、

「以上です」

都合12名の女子をずっとけさせる魔法の言葉だった。

「あ、あのー……」

彼のおんまりな自己紹介に涙声になりながらも抗議をしようとする山田先生。

背後からかけられたその声に思わず振り返ろうとした一夏だったが……。

パンツ！という乾いた音とともに頭への強烈な衝撃によってその行動は止められた。

「いつ——！？」

痛い。と言おうとしたのだろうその言葉は正しく発せられることは無かった。

その一撃はそれほどまでの威力だったということだろう。

そしてそんな一撃を出席簿で繰り出した人物は何時の間にか一夏の背後に立っていた女性だった。

スラリとしたその身体は程よく鍛えられていて、しかし女性的なボディラインは一切失われていない。その長身を包むのは黒いスーツと同色のタイとスカート。きりつとした鋭い双眸はまるで狼を連想させる。

一夏はその人物に心当たりがあるのか恐る恐ると振り返り、

「ち、千冬姉——ッ!?」

パアンッ!と本日二発目の出席簿による一撃を喰らった。

「織斑先生と呼べ」

「……はい。織斑先生……」

さてこのやり取りで気付いた者も居るだろうが彼女『織斑 千冬』
は一夏の実の姉である。

そんな人物がなぜこのIS学園に居るのかというと、

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聴き、よく理解しろ。できないものはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞け。いいな」

そう。彼女はこのIS学園の教師なのだ。
さらに言つとこのクラス、1年1組の担任でもあるのだ。

そしてそんな彼女からの暴力的とも取られかねない発言に対して起きたのは困惑のざわめきではなく、黄色い声援だった。

「きゃーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

喧々譁々。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そんな様子に千冬は鬱陶しそうな表情を隠そうともせず呟いた。が、

「きゃああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そして付け上がらないように躡をして〜！」

しかし彼女のその辛辣な物言いは彼女達を再び炊きつけるだけであつた。

「…で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

そんな少女達を放置することに決めたらしい彼女は先程のあんまりな自己紹介について一夏に言及する。

「いや、千冬姉、俺は——ッ」

パンツ！と本日三発目になる出席簿が一夏の頭に炸裂する。
どうやら彼は余り学習というものをしないらしい。

「織斑先生、だ。馬鹿者」

「……はい。織斑先生」

頭を押さえながら返事をする一夏を一瞥し、千冬は教壇へと戻っていく。

そこで彼女は未だ騒がしい教室内を静かにさせるめ、手に持った出席簿で教壇を叩いた。

それほど大きい音が出たわけではないが今静かにしなければその出席簿が今度は自分の頭に振り下ろされるであろう事を察した生徒達は一発で静かになった。

「さて、自己紹介の途中だがここでもう一人、諸君等のクラスメイトを紹介する」

その千冬の一言によつて再び教室内が騒がしくなる。

しかし彼女が再び、今度は少し強めに教壇を叩くと皆一様に口を閉じた。

「静かにせんか馬鹿者。で、予め言っておくがそのクラスメイトとは先日発表されたもう一人の男のIS操縦者だ。同じ男の織斑が居るといふことで急遽このクラスへと入る事が決まった」

千冬の話に何人かの生徒が声を上げそうになるが、千冬の出席簿を持つ手がピクリと動いたのを見て慌てて口を閉ざすのだった。

そんな生徒達を横目で見ながら彼女は教室のドアへと声を掛けた。

「入って来い。天河」

その時、箒はこのSHRが終ったら一夏と何を話そうかを考えていた。

しかしそんな彼女だが織斑先生の話はしっかりと聞いていた。

一夏に次いで発表されたISを起動した男。

しかしその情報は極端に少なく、その名前さえ明かされていないかった。

そんな謎の多い2人目の男のIS操縦者だが、正直箒には興味はなかった。

織斑先生が、彼の名前を呼ぶまでは。

「入って来い。天河」

ドクンッ！と心臓が大きく跳ねた。

『箒ちゃん』

頭の中に彼の声が響く。

3年前に突然姿を消してしまった、彼の声が。

天河という苗字は珍しいが彼のほかに居ないなんてことはない。だから今天河と呼ばれたのは別人だ、彼ではない。

だって彼は3年前に消えてしまったから。警察が搜索しても遂に見つからなかった彼が此処にいるはずがない。

ガラリ、と。教室のドアが開かれた。

そこから現れたのはスラリとした背の高い男だった。

短く切られた赤茶色の髪。175cmはあるだろうその身体は一夏が来て居るものと同じ、男性用のIS学園の制服に包まれている。

しかし一番目を引くのは彼の顔の半分を覆っている黒いバイザーのようなものだろう。

そのバイザーの所為で彼の表情を伺うことは出来ないが、見えている口元は硬く真一文字に閉ざされていて、何者もを寄せ付けない雰囲気醸し出していた。

『よろしくね。箒ちゃん』

…違う。

彼はあんな人を寄せ付けないような雰囲気をしていなかった。

「天河。自己紹介をしろ」

「天河 てんかわ 明人 あきと だ」

『俺、天河 明人って言うんだ』

違う…。

彼はあんな冷たい声をしていなかった。

「全く。お前もまともに自己紹介が出来ないのか…。仕様が無い、だれか天河に質問がある者はいるか？」

「はい！そのバイザーみたいなのはなんで掛けてるんですか？」

「生まれつき視力が弱くてそれを補うために掛けている」

『大丈夫！篝ちゃんが迷子になっても俺が直ぐ見つけてあげるよ』
違う。

彼はとつても目が良くて、よく迷子になってた私を直ぐに見つけてくれた。

「はい！趣味はなんですか？」

「特に無い」

『篝ちゃん。今日は肉じゃがを作ってみたんだ。食べてみてよ』

違う…！

彼は料理が好きで、良く私に作ったものを食べさせてくれた…！

「はい。好きな食べ物は？」

「辛いものだ」

『んー…、嫌いってわけじゃないんだけど。舌がおかしくなりそう
で…』

違う！

彼は舌が馬鹿になるからといって辛いものなどは余り食べなかった！

「はいはい！そのバイザー取ってみて下さい！」

「ふむ、そうだな…。天河、これから１年間同じクラスで過ごすんだ。皆に素顔くらい見せておけ」

「……………」

千冬先生の言葉に彼は無言でそのバイザーを取る。

違うー！！

彼はあんな突き刺さるような鋭い目をしていなかったー！！

でも。

その目を見た瞬間に、分かってしまった。

こんなに変わってしまったても、彼が3年前に居なくなってしまった『明人』だということが。

「さて、そろそろ時間がない…。次の質問で最後としよう」

織斑先生が何かを言っていたが聞こえない。

夢遊病者のように席を立ち彼の元まで歩み寄る。

周りの人達が怪訝な顔でこちらを見たり、声を掛けたりしてくるが、止まらない。

そして彼の目の前までたどり着くと、未だ無表情な彼に向けて声を掛けた。

「明人……？本当に…明人なのか？」

私の言葉を聞き、今まで全く変わらなかった彼の表情が、崩れた。

「第………ちゃん？」

こうして、お互いにもう出会うことは無いと思っていた幼馴染はここに再会したのだった。

第1話（後書き）

感想などありましたらよろしく願います。

第2話（前書き）

今回本編が凄く短いですが、最後にアンケートがあるのでよろしければご協力お願いします。

第2話

今はS H Rが終わり、1限目の授業が始まるまでの10分間の休み時間。

学園の屋上には人影が2つ。

2つの人影、少女と少年は向かい合っており、しかしお互いに口を開こうとはしない。

そんな状況のまま時間は過ぎ、只でさえ10分という少ない休み時間も残り僅かになってしまった。

びゅう、と強い風が吹き少女——篠ノ之箒の後で結った長い髪がはためく。

「明人……」

漸く箒の口が開かれてそこから出たのは、3年前に行方不明になって、そして今自分の目の前に居る幼馴染の名前だった。

箒は今にも泣きそうな表情で目の前の人物——天河明人を見つめる。

対する明人の表情は黒いバイザーに覆われていて窺うことはできない。

「久し振り、だな……」

「ああ」

搾り出すような箒の声と、それに応える明人の淡白な声。

「げ、元気にしていたか？」

「ああ」

3年振りに会った幼馴染に何を話したらいいのかわからず、自然と会話の内容は当たり障りのないものになってしまふ。

そして明人の声は相変わらず抑揚がない、何を考えているかわからないものだった。

「……この3年間…一体何をしていたんだ」

「……………」

箒のその問いに明人は応えない。

「心配していたんだぞ…」

「……………」

俯き、声を震わせながら言う筈に明人は応えることができない。

「3年前とはまるで別人じゃないか…！」

「……………」

筈は感情を抑えることができずに徐々にその声音が強くなる。

「この3年に一体何があったんだ！明人！」

何時までも応えようとしない明人に遂に筈は声を荒げて明人に詰め寄る。その瞳に涙を溜めて。

そんな筈に、明人は漸くその固く閉じられた口を開いた。
そしてその口から出た言葉は、

「知らないほうが良い」

やはり抑揚の無い声で、彼女を冷たく突き放した。

「——っ！！」

パンッ！と乾いた音をたてて明人の頬が叩かれる。

明人の頬を叩いた筈はその勢いのまま彼の胸倉を両手で掴む。

「知らないほうが良いだ！お前が居なくなつたあの時！私がどれ程心配したと思つてゐるんだ！！」

そう叫ぶ彼女の瞳から大粒の涙が零れる。一度流れてしまつた涙はもうとめることができない。

「警察が探しても見つからないし！私は…もう、明人が…し、死んじゃつたのかと………うつ！」

そこまで言つて彼女は彼の胸倉を掴んだまま俯いてしまう。
その肩を震わせ、足元に滴を降らせ小さな染みを作る。

叩かれて頬を僅かに赤くした明人は自分の制服を掴む彼女の手を両手でそつと引き剥がす。
相当強く握つていたのだらう。彼女の手が剥がされた場所にはくつきりと皺がついていた。

「この3年間に何があつたのか、君に話すことはできない」

彼はそう言つと彼女の手を離し、屋上の出口へと向かつて歩き出す。
再び彼の口から放たれた拒絶の言葉に筈は両の手で顔を覆い、肩を震わせて嗚咽を漏らす。

そんな彼女の横を通り過ぎるとき明人が唐突に口を開いた。

「ごめん。箒ちゃんには知って欲しくないんだ…」

「…………え？」

箒は彼の言葉に思わず顔を上げ、振り返る。

しかし彼はそれ以上何も語ることなく屋上を後にした。

先程の彼の声は今までのような抑揚の無い、無感情な声じゃあなかった。

その震えた声には深い悲しみとほんの少しの恐怖が含まれているように箒は感じた。

一体何が彼をあんな風に変えてしまったのだろうか。

「明人……………」

その答えは分からなかったが最後の彼の言葉に彼女は昔の、あの優しかった頃の彼を感じたのだった。

第2話（後書き）

皆様にアンケートです。

この小説のメインヒロインは筈ですが、あと1人サブヒロインを追加したいと思っています。

因みに一夏のファースト幼馴染を主人公が盗ってしまったのでセカンド幼馴染である鈴はヒロイン候補から外させていただきます。

と、いうことで。候補は、

？セシリア・オルコット

？シャルロット・デュノア

？ラウラ・ボーデヴィツヒ

の3名になります。

そのほかのキャラにしましてはもしご希望が多ければサブサブヒロインぐらいの扱いで主人公と絡ませたいと思います。

アンケートの期間はセシリア戦が始まるまでとしたいのであと3話後ぐらいまでとなります。

尚、回答は感想にて受けつけます。

皆様奮ってご参加下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540z/>

纂のセカンド幼馴染は...

2011年12月14日07時52分発行